

## 英語教育実践研究会

## 授業実践研究

第3号

巻頭言	1
第3回研究会特別講演	2
第3回研究会事例発表1	4
第3回研究会事例発表2	6
第3回研究会事例発表3	8
第3回研究会事例発表4	10
会員の広場	12
2019年度研究会活動報告、会計報告	13
2020年度研究会のご案内	15
編集後記	15

## \*\*\* 巻頭言 \*\*\*

## これからの英語教育—母語教育との連携

奥田 洋子  
(跡見学園女子大学)

経済協力開発機構が12月に発表した学習到達度調査の結果によると、日本は「数学的リテラシー」では6位、「科学的リテラシー」では5位であったものの、「読解力」では15位であった。その原因のひとつとして、新聞等では母語である日本語の読書教育が抱えている問題が指摘されている。

つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏は、以前から、英語も日本語も言語であり、土台である第一言語が苦手、第二言語である英語の方が得意であるというようなことはあり得ないと言っている。また三森氏は、日本の学校教育における読書教育には、幼児期から高校にかけて、読書に必要な技術を習得するための系統的な指導シ

ステムが欠けている、とも述べ、ドイツの例を挙げている。それによると、ドイツでは、幼稚園では読み聞かせと分析的問いかけ、小学校1年生から4年生ごろまでは再話、中学校2年生ごろまでは要約、中学校3年生以降はテキストを分析・解釈するための読書教育が行われているという。

このような読書教育で教えられているスキルは何も母語に限ったものではない。語彙や文法は言語ごとに異なるものであるが、いわゆる「言語技術」は、すべての言語に共通しているからである。しかも、ここで注目すべきことは、このような読書教育においては、「読む」だけでなく、「書く」はもちろん、「聴く」や「話す」も含む、総合的な母語の四技能教育が行われていることである。

学習指導要領が変わり、この4月からは小学校3年生から英語教育がスタートする。どう教えたらよいのか戸惑っている小学校の先生も多いのではないだろうか。もし日本でも欧米のような日本語の系統的な読書教育が行われていたら、小学校の先生は、その教え方をそのまま英語の授業に応用することができるはずである。

たとえば、代表的な言語技術の教授法のひとつに「ショウ・アンド・テル」がある。生徒は筆箱など何かひとつの物を選び、クラスでそれを見せ、まず形、次に素材、次に色というように説明する。もし生徒がすでにこの技術を母語である日本語で経験していれば、これを英語の授業に導入するのは比較的容易である。先生は説明に時間を費やす必要がないし、生徒もやり方を知っているので理解し易い。要するに、母語教育と外国語教育とで連携を取ることで、先生にとっても生徒にとっても余計な負担を軽減することができるのである。

現在の小学校3年生には、十年後の大学受験生も含まれる。大学で英語を教える私たちも無関心ではいられない。それどころか、このような日本語教育と外国語教育の、言語技術を介在させた連携は、大学生を対象としたクラスにも十分応用できる。系統的な母語の読書教育を早期に取り入れることによって、日本語教育だけではなく、英語教育をも飛躍的に改善させることができるのではないだろうか。

2019年11月30日、会場：戸板女子短期大学  
2019年第3回英語教育実践研究会  
特別講演

英語を教えるということ  
—理想と現実のはざままで30年—  
高野 嘉明  
(青山学院女子短期大学)

この講演では、日本の英語の地位・役割を確認した上で、現在の日本の英語や英語教育に関する誤謬、およびその因って来たる原因や理由を考え、次に高校の英語教育の現状を概観した上で、そのような英語教育を受けた大学生・短大生の英語の授業への取り組み方を観察すれば、英語教育を諦めてこそ開ける道がある、ということを講演者(以下「筆者」)の教育経験に基づいて振り返った。

## 1. 日本における英語の地位・役割

今や英語は国際語と呼ばれており、実際それは否定できない事実である。しかし、英語は国際語ではあるが、世界の各々の国で英語が全く同じ地位を占め、同じ役割を果たしているかといえ、それは違うといわざるを得ない。

日本の英語は「外国語としての英語」であり、「母語としての英語」や「第二言語としての英語」とは異なる。日本では、国家の運営や個人の日常生活はすべて日本語で営まれており、英語はほぼ必要ない。ただ、外国人との英語によるコミュニケーションは不可避であり、その能力の養成を目的として、学校教育の一環として「英語」という科目が設置されている。

日本の英語教育を考える場合、日本の英語が「外国語としての英語」であるという事実を前提としない限り、理想と現実の距離が大きくなりすぎて、効果的な英語教育は成立しない。

## 2. 日本の英語・英語教育に関する誤謬

理想と現実との乖離の原因や理由は、日本の

英語や日本の英語教育に関する誤った考え方が多すぎる、ということである。日本の英語教育が行われている状況としては、英語の授業時間は微々たるもので、教室を除けば英語が話されている環境はほとんどなく、英語ができることによって得られる利益もさほど大きくなく、従って英語学習の動機が希薄であり、また母語習得の臨界期が終わる頃から英語教育が始まるので意識的な努力をしないと英語学習は不可能、といったようなものになるであろう。

このような状況の下で多少なりとも効果的な英語教育を行おうとすれば、母語によって習得した論理的な思考能力や分析能力、類推能力、言語に関するメタ知識などを最大限に活用し、語彙と文法を覚えつつ多くの英文を読むことによって潜在的な英語力を養成し、それを「読む」「書く」「聞く」「話す」の4技能の顕在能力へと結び付けていく、というのが現実的かつ効果的な方法であろう。

しかし、文科省が推進している今の英語教育は、文法を体系的に教える授業はなく、発音記号を教えることもせず、「読む」「書く」という文字による英語教育を軽視し、「聞く」「話す」という音声重視の方向になっている。また、英語教育の専門家でない一部の識者の事実誤認に基づく発言が英語教育に負の影響を与えている、という側面もある。その一方で、言語・英語教育の理論や実践に基づいて、真に実のある英語教育改革を唱えている専門家の声は、教育行政には全く届かない、という現実もある。

英語教育に関する識者の誤謬には、(a)日本は英語ができない国である、(b)英語ができないと就職に不利である、(c)英語圏の幼児の母語習得と同じ順序で英語を教えるべきである、(d)文法を気にするから英語ができない、(e)英語を読む時は日本語に置き換えずに英語で考えなさい、(f)英語を読んでいて未知の語が出てきても、すぐに辞書は引かないで文脈からその語の意味を推測しなさい、(g)発音記号を知っていたとしても、実際に発音することができなければ意味がない、などがある。

上記(a)と(b)の誤謬は「マスメディアによる誤情報の発信」が原因であり、(c)～(f)は「言語教育に関する、または母語習得と外国語学習の違いに関する認識不足」がその理由であり、(g)は「学校の英語教育において可能なことと不可能なことの区別の欠如」が原因である。

### 3. 高校の英語教育の現状

以上のような誤った英語教育観を背景として、筆者が教えている多くの学生が通っていた高校では、生徒たちは英語の教員が語彙や構文の説明をしてもよく理解できず、定期試験になると、先生が配布した、教科書の英文の日本語訳のプリントを徹底的に暗記する、しかも場合によっては、先生がそのプリントの中のどの部分が試験に出るかも教えてくれる、ということである。また、週1回、英語の単語テストを実施している高校も多く、生徒はテストの前夜には単語帳の試験範囲を何とか暗記するが、テストが終わるとすべて忘れてしまう、ということを繰り返しているということである。

### 4. 大学生・短大生の英語の授業への取り組み方

上述のような高校の英語教育を受けて筆者の短大に入学してくる学生たちの多くは、例えば英語母語話者が担当する授業で、「タバコの手」<sup>1)</sup>という題目でプレゼンをするという課題を出されると、スマホを利用して「タバコ」と「手」という2つのキーワードを入力してネット検索を行い、様々な情報の中から1つを選択し、それを英語に翻訳させるのであるが、今度はその英語が分からない、といったような状態である。

もちろん、筆者が担当している英文講読的な授業でもスマホがフル稼働しているようである。学生に英文を読んで訳させると、あまりうまく読めないのに訳だけは不釣り合いに立派、ということなどは日常茶飯事である。

### 5. 英語教育を諦めてこそ開ける道

このような学生を相手にして一体どのように英語の運用能力を習得させればいいのか、とい

うことを長年考え続けて、結局、英語を教えることを諦めてこそ開ける道がある、と筆者は悟った。卒業生が仕事で英語を使うことはほぼあり得ないので、英語の授業は担当するが、英語を教えることは諦めて、日本に関する事柄が扱われている英語の教材を利用しながら、その内容を日本語で理解させ、それについて少しでも深く日本語で考えさせて、今後少しでもよりよい人生を歩んでいくための知恵を学生に授けることに専念している。その方がよほど時間と労力の無駄にはならない、と考えている。

その一方で、本気で英語の勉強がしたいと考えている学生は徹底的に支援しており、これに関しては2つのことを実践している。1つは希望者を対象として週1回90分、英語の読書会を開催することであり、もう1つは英語学習のために読む英文の提供である。この後者に関しては、様々な分野、難易度、長さの英文を用意し、自主作成のテストで学生の英語力を測り、各学生が興味を示す内容の、各学生のレベルに合った英文を与えている。

また、できるだけ多くの学生により多く学んでもらうためには、学生との信頼関係が重要であると考えてきた。信頼関係が成立している学生は、より熱心に話を聞いて学んでくれるからである。信頼関係を築くために、筆者は上述の英語学習支援ばかりでなく、就職相談や人生相談にも積極的に応じてきた。これには膨大な時間と労力を要するが、学者・研究者よりは教師・教育者を目指そうと固く決心している筆者は、一部の学生だけだったとしても、「私にとってはとてもいい先生だった」と思ってくれば、卒業後も筆者の存在がその卒業生の心に残るだろう、と考えてきた。

定年退職の年度の終わりに近い今、改めて振り返ってみると、よい教師・教育者を目指すと決めて実践してきたことはかなりの程度まで満足できるものではないか、その意味で筆者のこれまでの教員生活はかなり恵まれたものだったのではないか、と思っている。多くの卒業生と学生に心から感謝したい。

2019年11月30日、会場：戸板女子短期大学  
2019年第3回英語教育実践研究会  
事例発表1

バランスの取れた4技能育成を目指す授業改革の試み—短期大学1年生必修授業における実践報告—

中村 公子  
(戸板女子短期大学)

はじめに

中等教育機関における英語教育が4技能の育成に向けて大きく変化してきている昨今、大学・短期大学においては、学生たちが高校までに得た知識や技能を更に高め、社会に送り出すためのより充実した教育が求められている。しかし、限られた時間の中で4技能を同時に育成することは非常に難しいのが現状であり、ましてや英語非専攻学生に対する必修科目としての「英語」となれば、モチベーションの点からもその育成は困難を極める。数年に渡る試行錯誤の結果、戸板女子短期大学では本年度より日本人講師とネイティブ講師が半々にESPを取り入れた授業展開を試みている。本報告では、この新たな試みについての実践報告をすると共に、学生のアンケート結果から本授業改革を検討する。

## 1. 英語教育改革と高等学校での英語指導

### 1.1 学習指導要領の変化

近年、文部科学省では小中高を通じてコミュニケーション能力、殊に「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく育成することを目標に、学習指導要領の大幅な見直しを進めている。その中で高等学校においては平成25年度からコミュニケーション英語Iが必修化され、英語で授業を行うほか、4技能統合型を核とした言語活動と、従来からの課題であった「話す」「書く」を含めた発信力の強化を目指した教育活動の展開が求められている。それにより、それまで主流であった講義型の授業が、生徒参加型に取って代わり、熟達度を測る指標にCEFR

が用いられるようになるなど中等教育における英語教育は大きな転換期を迎えている。

### 1.2 高校生の英語力の変化

では、そのような変化の中にあって、高校生の英語力には変化が見られたのであろうか。ベネッセコーポレーション行った高校生一万人のGTEC結果分析によれば、2017年から2018年の一年間でスコアのボリュームゾーンがCEFR A1からA2へと変化している。特にSpeakingの伸び率が顕著であるが、これまで不安視されていたReading, Writingも確実に伸びている。このような中であって、大学教育に求められる改革への期待はいやが上にも高まるのは当然の流れと言えよう。

## 2. 戸板女子短期大学における試み

### 2.1 学生の現状とこれまでの授業展開

授業に関する学生の意識調査によれば、本学にある3つの学科のうち、自身の担当する英語非専攻の2学科（食物栄養科・服飾芸術科）では、英語を履修した理由として実に90%を超える学生が「必修のため」と答えており、「興味をもって」と答えた学生はほんの数パーセントにも満たない。また、本学の入学試験では英語の受験が必須ではないため、英語に苦手意識を持っている学生が大多数を占める。そのような学生たちを社会で通用するレベルに引き上げることは至難の業と言っても過言ではないが、そのような状況の中、これまでも積極的にアクティブラーニングを取り入れてみたり、習熟度別にさまざまな方法でクラスを編成してみたりと試行錯誤を繰り返してきた。しかし、1クラス約50～55名という大きなクラスサイズではそういった工夫が機能しないことも多く、4技能をバランスよく習得させることは難しいと判断、抜本的に授業の在り方を見直すこととなった。

### 2.2 見直しのポイント

授業を見直すにあたり、「4技能を総合的に伸ばし、社会で通用する英語力を身につける」と

いう目標を達成するため、①少人数化を実現し、一人一人に目が行き届くようにする ②学生の発話の機会を増やす ③各時間に必ず4技能のすべてに触れさせる ④コミュニケーション重視の中にも文法や語彙といった英語の基礎を固める ⑤ネイティブの英語に触れさせる ⑥グローバルな視点を育成する ⑦学科ごとのESPを強化する、以上の点をポイントに方策を探ることとした。

### 2.3 2019年度からの取り組み

上記のポイントを踏まえ、今年度より各クラスを半分ずつの約25名×2教室に分け、それぞれを日本人教員とネイティブ教員が45分ずつ交代で指導するという方法で授業を展開している。クラス分けには、入学時に実施したGTECの得点を利用し、日本人教員がReadingとWriting、ネイティブ教員がListeningとSpeakingを担当、毎時間確実に4技能を網羅した授業を行えるようにしている。

### 2.4 具体的な授業の展開方法

日本人教員の受け持つRWのクラスでは、海外出版社のReadersシリーズを使用し、TSLT(task-supported language teaching)の方策を用いて授業を展開している。テキスト選定に当たっては、各学科の学びと繋がる内容であることを重視し、学生が興味をもって取り組めるよう心がけた。ワークシートやスライドを多用しながら学生の想像力に働きかけ、要旨を掴むことにポイントを置いている。そのため学生たちには予習は不要、復習に重点を置いて学習するように指導している。授業では簡単な導入の後、それぞれ時間を与えてのスキミング・スキミングで要旨を掴ませ、その後フォローアップのアクティビティへと進む。アクティビティの一例としては①答えはどこ？(テキスト本文を小分けしたものを教室内に貼り、問題用紙に書かれた答えをペアで探しあてる)②マッチングゲーム(本文の内容を表す絵とその説明文をマッチさせ、更に正しい順序に並べる)など

のゲーム的な要素を含んだ活動に取り組みせ、楽しみながら定着を図っている。また、本文の内容と関連したTED-ed等の短い動画を使用したアクティビティも有効であった。

次にネイティブ教員の受け持つLSでは1,2週目にビジネス英語のテキストを、3週目にESPとして食物栄養科であれば栄養成分表を作成したり、服飾芸術科であれば流行りのファッションアイテムをプレゼンしてみたりとこちらも各学科の学びとリンクした内容を取り入れ、3週を1サイクルとして授業を展開している。学期の最後にはまとめとして学生がペアでスクリーンを書き、ロールプレイプレゼンテーションとして発表するのであるが、ほぼ全員が暗記して臨むなどこれまでには見られなかった積極的な取り組みを見せたことが印象深い。

### 3. アンケート結果より

まだ1年目の取り組みではあるが、各学期末に実施している学生の授業アンケートからは、この授業形態が好感をもって受け止められていることが分かる。具体的には、RWでは「専門に関する英語を学べたためになった」「映画やビデオを使って楽しく勉強できた」「一文ずつ訳すのではなく、大まかな意味を掴むことに最初は戸惑ったが、英語を読むことに前ほど抵抗がなくなった」など、LSでは「日本語を使わないからよく考えるようになった」「強制的にヒヤリングが鍛えられた」「ペアワークでたくさん英語を話せて、少し英語に慣れることができて良かった」などの好意的な感想が多数見られた。

### 4. まとめ

以上の点から、見直しポイントとして掲げた7つの項目はほぼクリアできているものと考えられる。ただし、教員間の連携や与える課題の質、量などに改善すべき点があることも事実であり、今後も引き続き検討を続けていく予定である。

参考文献：平成29年度英語教育改善のための英語調査 事業報告 文部科学省

2019年11月30日、会場：戸板女子短期大学  
2019年第3回英語教育実践研究会  
事例発表2

授業における外国人ゲストアシスタントの活用  
-産業能率大学1年必修英語科目での試み-

日吉佑太  
(産業能率大学)

### 1. はじめに

本稿は、産業能率大学経営学部1年生を対象とした必修科目「英語 IA」において、2019年度前期に行った、外国人ゲストアシスタントを招いた授業の実践報告である。約1か月に渡る授業内で準備の後、実際にゲストが参加する授業では、学生によるグループプレゼンテーションを中心とした授業を実施した。

### 2. 「英語 IA」の概要

本稿で取り上げる科目「英語 IA」は、産業能率大学経営学部において実施されているものである。この科目はプレースメントテストに基づいた4段階のうち、最も英語運用能力の低いグループの学生が1年前期に受講する必修科目である。今回はこのうち筆者が担当する2クラスで該当の授業を行った。対象となった学生数は合わせて52名であった。

「英語 IA」の授業は週2回(各100分)行われ、通常は、学生が自らに関する事柄を英語で表現し、発信することを重視したリスニング・スピーキング中心の授業を行なっている。

またこの科目では、各学期の授業2回について、外国人アシスタントをゲストとして招くことが認められている。その際、スケジュールや授業への参加形態、関与の程度は概ね授業担当者の裁量に任せられている。

### 3. 問題意識と目的

今回の授業実践の前提となる問題意識として、

英語学習者の言語態度(Language Attitudes)がある。言語態度とは、「異なった言語または言語変種を持つ話者が、互いの言語あるいは自分自身の言語に対して持っている態度」(ロングマン応用言語学用語辞典)であり、肯定的、否定的態度いずれも含まれる。

大学生に限らないことであるが、日本人 EFL 学習者の言語態度には、母語話者を「正しい」英語話者と考え、目指すべき学習モデルと考える傾向が見られる。他方非母語話者については、英語話者として、また学習モデルとして、母語話者よりも否定的に捉える見方が強い(天野(2005); Hanamoto(2013)など)。

上記の点を鑑み、今回「英語 IA」の外国人ゲストアシスタント参加授業の計画を行なった。すなわち、母語話者、非母語話者の話す多様な英語に触れる機会を得ることによって、学生に「国際語としての英語(EIL: English as an International Language)」「共通語としての英語(ELF: English as a Lingua Franca)」といった英語のあり方を知るきっかけにしてもらうこと、英語を通して他者に興味・関心を持ち、ひいては英語学習意欲を高める契機にもらうことを目的として授業を計画した。

### 4. 当該授業の概要

まず2019年度前期の「英語 IA」授業のうち、7月11日にインドネシア出身女性、7月16日にオーストラリア出身男性をゲストアシスタントとして授業に招くことを決定した。これを受けて、実際にゲストが参加する授業の約1か月前から、通常の授業の一部を使ってその事前準備を行なった。これはConsciousness Raisingとして、ゲストの出身国や現代の英語のあり方について十分な知識を得てもらうことを意図したものである。

#### 4.1 事前準備授業(第1回)

学生が、ゲストの出身国について知っていることやイメージをグループで出し合った。次に人口・首都・国旗といった基本的な情報をイン

ターネット調べて発表した。最後に YouTube で両国を紹介する動画を視聴し、その内容についてあらかじめワークシート上に示しておいた質問に解答した。

#### 4.2 事前準備授業（第2回）

学生3～5名のグループ分けを行い、各グループ内で、リーダー、資料集め、原稿チェック、スライドなど役割分担を決めた。さらに、2か国のうちどちらについて発表を行うか、またその国について調べて発表するトピックを決定した。この際、トピックの重複がない限り学生の希望を優先し、学生のモチベーションへの配慮とプレゼンテーションに対する不安の軽減を図った。

#### 4.3 事前準備授業（第3回）

『英語』とはどんな言語か」「誰が誰と英語で話すのか」をテーマとして、Kachru(1985)の同心円状モデルを示しながら、EIL、ELFという多様な英語の使用状況について、学生への質問を交えながら説明した。

#### 4.4 ゲスト参加授業

ゲスト参加授業は以下の計画の通り実施した。

- 1) ゲストによる自己紹介・自国の紹介、Q&A（約30分）
- 2) 学生によるグループプレゼンテーション、フロアおよびゲストとのQ&A（各グループ約10分、合計約40分）
- 3) 授業担当者による、ゲスト出身国に関するクイズ（約20分）

ゲストには事前に上記授業計画を伝え、1)についてスライドや画像の準備をすること、授業全体を通して学生への質問、プレゼンテーション内容へのコメントを行い、学生の英語発話機会を積極的に創出することを依頼した。

#### 5. 学生の反応

授業後に行なった調査による学生の回答の代表的なものを次の表に示した。

##### 良かった点

- ・スライドや、準備しておいた質問を英語ですることができ、自信がついた。
- ・英語でのプレゼンテーションは初めてだったが、しっかりとしたものができた。
- ・準備を通して新しい単語や表現を学ぶことができた。
- ・相手の国についての知識が深まった。
- ・英語を使って相手と交流することができた。

##### 今後改善すべき点

- ・発表の際、原稿に頼ってしまった。
- ・発音、アクセントまで力を入れられなかった。
- ・準備時間、リハーサルが足りなかった。
- ・相手から質問されたときに英語で対応できなかった。
- ・英語力に自信がなく、自分から質問できなかった。

学生の回答には、英語が通じた/通じなかった、英語でプレゼンテーションができた/できなかった、といった視点のものが多かった。その一方、少数ながら、共通語として英語を使う経験ができたこと、ゲストの出身国への知識や関心が深まったことに言及する記述も見られた。

#### 6. まとめ

上記の回答結果をまとめると、当初意図した目的よりも、プレゼンテーションを含めて英語そのものを運用できたか否か、という語学習得の従来の視点から今回の授業を受け止めるものが主流だった。一方で、英語のあり方や、相手国についての気付きに関しては、残念ながら少数意見に留まった。

しかしながら、これは調査では明確に現れなかったことではあるが、学生と筆者のその後の授業でのやり取りから、彼らの英語や海外への関心、肯定的な反応が、昨年度までに担当したクラスよりも高まった印象を受けたことは記しておきたい。

今後は同様の授業について、統計的に効果を検討し、ゲストの国籍、性別、授業で課すタスクなどの条件が学生の言語態度に及ぼす影響について検証を進めていきたい。

2019年11月30日、会場：戸板女子短期大学  
2019年第3回英語教育実践研究会  
事例発表3

TED Talks を教材とした  
英語プレゼンテーションの導入  
～グループプロジェクト実践報告～

小抜 久子

(共立女子大学・芝浦工業大学・立教大学)

はじめに

近年、TED Talks を英語教育へ活用しようとする試みが広がりを見せている。TED は“*Ideas Worth Spreading*”をコンセプトとし、科学、国際問題、教育、人生哲学等様々なテーマに関する講演動画を無償でウェブサイト上に公開している。非英語母語話者による講演も多く含まれ、また日英語の字幕も利用可能であるため、英語教材として高く評価されている。本稿では、「メディア英語」の授業内で、TED Talks を教材として実践した、英語によるグループプレゼンテーション・プロジェクトの内容を紹介する。三期にわたる授業実践を通して、当該プロジェクトを成立させるために必要なフレームワークを紹介すると同時に、履修学生を対象に実施した事前及び事後アンケートの結果から得られた知見を報告する。

## 1. 授業概要

都内女子大学国際学部 2・3 年生対象の選択科目「時事英語 II(メディア)」(全 15 回) の 2018 年度前期 20 名、同後期 23 名、2019 年度前期 28 名、合計 71 名を対象に、各学期中一回グループプロジェクトを実施した。同授業では、基本的に、英語ニュース教材を用いて、ニュース英語に親しむことを目的とした授業構成を柱としているが、アクティブ・ラーニングを取り入れる必要性から、6 週目の授業から 11 週目の授業では、TED Talks を用いた英語プレゼンテーション・プロジェクトを中心に授業を構成した。

## 2. グループプロジェクト実施方法

### 2.1 プロジェクト概要

履修学生 3~4 名を単位にグループを作った。グループ毎に最も興味をもった TED Talks (4~6 分のトークに限定) を一つ選んで、トークの主要なポイント(Main Points)とトークに関連して自分達が自由に調べ学習をした事柄 (Further Research) 及びその感想 (Comment) について PowerPoint Slides を作成して、10~13 分程度英語でプレゼンテーションをした。各グループの発表直後に、該当する TED Talks をクラスで視聴し、他グループの学生が感想を共有する場を設けた。一つのグループのプレゼンテーション、TED Talks 視聴、感想の共有までの所要時間は 20~25 分程になる。90 分授業での発表は 4 グループまでとなる為、発表には 2 週間を要した。

### 2.2 プロジェクト進行手順

プレゼンテーションの準備には毎授業時 50 分間を充て、4 週間使用した。グループワークを始める準備段階として、教師がサンプルの TED Talks, “How to Succeed? Get More Sleep” by Arianna Huffington (TEDWomen 2010) を提示し、Worksheet を用いて、ディクテーションやトークの Main Points の箇条書きを指導した。同時に、英語でのミニリサーチや短いコメント書きを体験させた。また、事前アンケートで、約 4 割の学生が英語プレゼンテーション経験がないと回答していた為、教師が上記サンプル TED Talks を使い、発表用の PowerPoint Slides (各スライドに Script を付けたもの) を作成した。このサンプル教材に基づき、英語プレゼンテーションの基本構成や使用表現等を指導した。その後、個人単位の宿題をベースに、授業時間内にグループとして発表項目を固めさせた。週毎にタスクを決め、提出された課題は、教師のフィードバックに基づいて再考・修正するよう指導した結果、各グループは段階的に PowerPoint Slides と発表 Script を完成させた。グループ全員がほぼ均等にプレゼンテーションで話せるよう、個人単位で発表を評価する形式を採用した。



### 3. グループプロジェクト学生調査結果

#### 3.1 調査方法

グループプロジェクト事前調査は、各期の初回授業時に、グループプロジェクト事後調査は、各期の最終授業時に、選択式とコメント記入の混合型のアンケート調査用紙(無記名式)を配布し、三期合計 71 名の履修者がその場で回答したものを集めて分析した。選択式の質問に関しては 5 段階のリッカート尺度を用いた。

#### 3.2 グループプロジェクトについて

事後調査で、「非常に楽しかった」「楽しかった」と回答した学生は 97% にのぼり、グループプロジェクトに対する非常に肯定的な姿勢が鮮明になった。「授業に積極的になれた」「興味がある事柄を深く調べられた」「分析力と思考力がついた」「今後も使いたいスキルがついた」等、自身のプロジェクトへの積極的な取り組みを評価する学生が多かった。また、「皆で意見を共有して協力出来た」「毎週提出する課題に向けて皆で頑張れた」「達成感を共有できた」「話した事がない人とも仲良くなれた」等、協働作業の成果とその喜びについて評価する学生も多かった。

#### 3.3 英語プレゼンテーションについて

事前調査では、61%の学生が「英語プレゼンテーションをしたい」との意向を示した。

これに対して事後調査では、今後も英語プレゼンテーションを「非常にしたい」が 30%、「したい」が 56%となり、合計 86%の学生が今後も英語プレゼンテーションをしたいという意欲を示した。「非常にしたい」が 30%増えた事は予想以上の結果であった。「プレゼンするまでのプロセスそのものが勉強になった」「今回のプレゼンで自信がついた」「英語が上達する」「英語を話す力がつく」「他の班の発表も聞けるのが面白かった」等、プレゼンテーション能力や英語力向上の実感や楽しさが肯定的に捉える要因となったようだ。また、Further Research の項目は、「トピックの理解を深め、発展させる喜びにつながって一番楽しかった」との記述が複数みられた。

#### 3.4 TED Talks について

事前調査では TED Talks に「関心がある」と答えた学生は 7 割を占めた。事後調査では、履修学生全員が TED Talks はプレゼンテーション教材として「大変よかった」「よかった」と回答した。「どの題材も面白い」「選ぶ作業も楽しかった」「英語で英語以外の事を学び、詳しく知る機会が出来た」「自分達が理解しやすいものを選べた」「各班の個性が出ていた」等が理由に挙げられた。「内容の面白さ」、「選択の幅の広さ」、「個性の表出」といった要因が TED Talks というメディア・コンテンツを学生にとって魅力的な教材にしているように見受けられる。

#### 3.5 オリジナルサンプル教材について

事後調査で、87%が「非常に役に立った」、13%が「役に立った」と回答した。「プレゼンの構成やプレゼン特有の表現を習得できた」「スライドの作り方や発表方法が具体的にわかった」「計画通りに進められた」等、サンプルの PowerPoint Slides や Script がグループワークを円滑に進める上で大事な指針になっていた事がわかった。

### 4. まとめ

TED Talks はそれ自体が学生にとって非常に魅力のある教材である。着眼点や内容の面白さに加えて、自分達の個性に合わせてトピックを選択し、学習を深める事が出来る「教材としての柔軟性や無限の可能性」が、学生を主体的な学習者へと導いてくれるように思われる。TED Talks を用いた英語プレゼンテーション・プロジェクトは、スピーキングスキルや表現力・分析力の向上といった学生の技能面の成長を促すだけでなく、興味のあるトピックについて主体的に調べ、仲間と試行錯誤を繰り返しながら英語で発表する経験を通して、達成感や自己肯定感、学習意欲の向上といった、学生の心理面にも前向きな変化をもたらしてくれると考えられる。

今後は、学生にプレゼンテーションの練習を十分にさせる工夫や適正なプロジェクト評価の確立といった課題に取り組む事が求められる。

2019年11月30日、会場：戸板女子短期大学  
2019年第3回英語教育実践研究会  
事例発表4

文学作品をどのように教えるか  
—英詩入門の授業と小説を使用した授業実践例  
の紹介—

森永 弘司  
(同志社大学)

最初に2つの大学での英詩入門の授業実践を報告させていただく。1つは滋賀大学経済学部2年生以上の専門選択科目「英語演習」(以下、「演習」として言及する)で受講生19名の授業で、もう1つの報告は同志社大学全学部対象の2年生以上の一般英語選択必修科目「イングリッシュ・ワークショップ」(以下、「ワークショップ」として言及する)で受講生82名の授業である。

使用したテキストは、金星堂刊行の *The Poetry of Film* (2005) である。テキストの構成は以下の通りである。Pre-Reading (テキストに出で来る単語を英語で説明したもの)、Exercise A (本文の正誤問題)、Reading (映画の粗筋を説明したもの)、Exercise B (テープを聞いて、空欄に入る単語を選択肢から選ぶ問題)、映画に登場する英詩の引用、英詩の解説、詩人の紹介、詩と映画の関係。掲載されている20本の映画と英詩は以下の通りである。

- (1) Roman Holiday “Arethusa” by Shelley
- (2) Orlando *The Faerie Queene* by Spencer
- (3) Sense and Sensibility “Sonnet 116” by Shakespeare
- (4) Mrs. Dalloway “Song” by Shakespeare
- (5) Dead Poets Society “To the Virgins, Make Much of Time” by Herrick
- (6) The Serpent’s Kiss “The Garden,” “To His Coy Mistress” by Marvell
- (7) Dead Man “Auguries of Innocence” by Blake
- (8) Splendor in the Grass “Ode on Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood” by Wordsworth
- (9) Brief Encounter “When I have fears that I may cease to be” by Keats
- (10) Bridget Jones’ Diary “To Autumn” by Keats
- (11) Waterloo Bridge “My Lost Youth” by Longfellow
- (12) Anne of Green Gables “The Lady of Shalott” by Tennyson
- (13) Sophie’s Choice “Ample make this Bed” by Emily Dickinson
- (14) The Bridges of Madison County “The Song of Wandering Aengus” by Yeats
- (15) Memphis Belle “An Irish Airman foresees his Death” by Yeats
- (16) Days of Wine and Roses “Vitae summa brevis spem nos vetat incohare longam” by Ernest Dowson
- (17) Telefon “Stopping by Woods on a Snowy Evening” by Robert Frost
- (18) Apocalypse Now “The Hollow Men” by T. S. Eliot
- (19) Four Weddings and a Funeral “Funeral Blues” by W. H. Auden
- (20) The Graduate “The Sound of Silence” by Paul Simon

両クラスともに最初の授業時に、好きな映画と好きな詩人を答えてもらうアンケートを実施した。「演習」のクラスでは、映画は29作品、詩人は10人の名前が挙げられていた。「ワークショップ」のクラスでは、映画は68作品挙げられていたが、詩人の名前はわずか7人しかなかった。

「ワークショップ」のクラスでの授業方法  
このクラスは通年のクラスなので、春学期にテキストに掲載されている映画20作のうち前半に掲載されている10作品を、秋学期に後半の10作品を扱った。最初にテキストのPre-ReadingとReadingのセクションを学生を指名し、説明および訳読させた。Exercise AとBは平易なのでとばす。その後で事前に指名しておいた3~5名から構成されるグループの学生に1回の授業で扱う映画1作品と英詩1篇に関して調べてきたことを資料(A4で4枚程度)として配布させ、30分程度のプレゼンテーションをおこなわせた。それが終わると、プレゼンを聞いていた学生からの質問やコメントを受け付けた。  
「演習」のクラスでの授業方法。

最初の授業は「英語演習」に興味・関心を抱いている学生に対する授業内容や授業方法を説明するための授業をおこなった。というのは、この時点では、まだ受講者は決定していないからである。第2週から授業に入った。参加者のプレゼンを主体とする授業を実施した。プレゼン担当の参加者には、Exercise A の解答、Reading の和訳、映画、詩、詩人の説明を義務づけた。プレゼンの時間は、25～30分とした。プレゼンの後は、担当者が補足説明等をおこなった。

「ワークショップ」の最後の授業時におこなった授業の良かった点に関するアンケートを掲載する。( ) は人数を示す。1. 英詩に興味・関心・親しみが湧いた。

(10) 2. 教養を高めるうえで役立った。(3) 3. 英詩に対する知識が増えた。(2) 4. いろいろな英詩に触れることができて良かった。(2) 5. 英詩に好きな詩ができた。(1) 6. DVDの『英詩紀行』が良かった。(1)

「演習」の最後の授業時におこなった授業の良かった点に関するアンケートを掲載する。1. 英詩に対する興味を持つことができた。(11) 2. 英詩や英詩の表現を知ることができた。(10) 3. DVDを視聴することで、詩人の生い立ちや人生、時代背景を知ることができた。

(6) 4. いろいろな英米の詩人を知ることができた。(4) 授業開始まえにおこなった好きな映画と詩人のアンケートの結果から、大多数の受講者が映画を視聴したいという動機からこの授業を受講したと推察できるが、最後の授業時のアンケートから、82名の受講生の「ワークショップ」では10名の学生に英詩に対する興味・関心を、19名の受講生の「演習」のクラスでは11名の学生に英詩に対する興味・関心を持たせることが出来たのは、予想以上の成功であったと考えている。

次に小説を使用した授業の実践を報告させていただく。昨年(2018)4つのクラスの受講生127名を対象に、アメリカ作家ウィリアム・サローヤンの名作 *Human Comedy* の抜粋をテキストとした授業をおこなった。

使用したテキストは松柏社刊行の森永弘司編著”William Saroyan’s Best Stories: From *The Human Comedy*”『100倍楽しめるサローヤンの物語』である。*The Human Comedy*は1943年に刊行されたサローヤンの代表作で、39篇の物語から構成されている。本書では全体のほぼ5分の1にあたる次の1から8までの物

語が収録されている。この授業では、15の物語の中で最も感銘を受けた物語を選ばせ(複数選択可)、何故その物語に感銘を受けたかを記述させるレポートを課した。

最初にこの小説の粗筋を説明させていただきます。主人公はホーマー・マコーレーという名前の14歳の少年で、彼には入隊しているマーカスという兄とユリシーズという年端もいかない弟とベスという州立大学に通う姉がいる。母は健在だが、父は他界している。彼は家計を助けるために、学校が終わった後、電報局でアルバイトをしている。この当時のアメリカでは、都市部では戦死の訃報は電話で知らせたが、一般家庭にまだ電話が普及していなかった田舎では主としてティーンエイジャーが戦死の電報を戦死者の家に配達していた。学生が最も感銘を受けた物語として取り上げた上位3つの物語は全て戦死の電報の配達に関連した物語である。1つ目はホーマーが初めて戦死の電報を届ける場面、ここでは息子が戦死したメキシコ人女性との戸口でのやり取りが、ホーマーの内面の葛藤を通して描かれている。2つ目は英語が読めないこの女性に頼まれて、戦死の電報を代読するホーマーが描かれている。メキシコ人女性は目の前にいるホーマーに少年時代の息子の面影を読み取り、家の中に入り自家製のキャンディーを食べてくれるよう懇願する。すすり泣きをはじめた女性から逃げ出したいと思いつつも、女性の悲しみを少しでも軽くしてあげるためにこの場から立ち去れないホーマーの姿が描かれている。3つ目は女性に突然抱きしめられ、「私の可愛い坊や、私の可愛い坊や」と語りかけながらも、やっとの思いで女性の家を出たホーマーが自転車に飛び乗り、泣きながら電報局に帰り着く物語である。上記の3つの物語はこのビルドゥングス・ロマン(教養小説)の中でも最も忘れがたい哀切極まりない物語である。少年の戦争に対する間接的なプロテストとも解釈できる場面である。

最後に現在までの文学作品を活用した授業実践で得た4つの知見について簡単に述べさせていただきます。1. 読みのモチベーションを高める効果、2. 教養を高める効果、3. 英語力、特に読解力を向上させる効果、4. 協同学習を活性化させる効果。少しでも多くの先生に文学作品を活用した授業をおこなっていただくことを願っています。


 会員の広場

### 学生に学ばせる授業改善のポイント

壁谷 一広  
(大阪体育大学)

学生の学力低下、非常勤教員の割合の拡大、画一的なシラバスの導入などにより、日本の大学においては、英語教育を効率的に行うことが主流になっているように見受けられる。英語を専門としない学生に対する英語教育ではその傾向が特に強く、多くの場合、複数のクラスで同じ教材を同じ指導法・進度で進めるといったもの、あるいは主に TOEIC などの資格試験対策が提供されている。こうすることによって、誰が担当でも良く、学習の成果が試験のスコアや合格率という目に見える形でデータ化されるため、大学（短大）側としては効率的な授業を提供できるのである。また、最近の大学教育のトレンドとして、アクティブラーニングを取り入れようとする動きも見られるようになっている。授業実践研究 No.3 の読者の広場では、このような状況の中で、クラス全体だけでなく個々の学生にも学ばせる授業改善のポイントを、実際の取り組みをもとに考えてみたい。

指導の工夫は様々なものが可能だが、授業そのもの、学生の個別の取り組み、および教員の役割に関するものは、教員の裁量の範囲で導入しやすく効果も確認しやすい。項目ごとに考慮したポイントは、以下の通りである。

#### 授業そのもの

- ・グループ・ワーク／ペア・ワーク
- ・パフォーマンス型／問題解決型
- ・繰り返しが多くなる工夫

#### 学生の個別の取り組み

- ・予習／復習を必要とする課題
- ・毎回同じ形式の課題を提供する
- ・アウトプットを必要とする課題

#### 教員の役割

- ・ファシリテーター
- ・支援の提供

次に、上記のポイントを反映した英語授業の実践例の要点と効果をタイプごとに4つ紹介する。

#### 実践例1：リーディング授業

4名以下のグループで、割り当てたパラグラフの内容を把握し英語1文で要約させた。これを発表し、クラス全体で共有し、まとめとして教員が解説と添削をした。授業外の個人課題として、毎回ユニット全体を英語2～3文で要約させた。その結果、ユニット全体を読む回数が増え、その一方で要約に要する時間が短くなり、要点の捉え方と英語がより正確になった。グループで課題に取り組む際に教員への質問が増え、グループ内の教え合い／学び合いも活性化した。

#### 実践例2：資格試験対策（TOEIC）

カリキュラム上のコアカリキュラムに位置付け、複数クラスが共通シラバスに従い、テキストをもとに独自に作成したプリントを使用して、ディクテーションやテキストの内容理解に取り組んだ。予習を目的として、授業の最初に、その日学習するリーディングまたはリスニングのユニットについてクラス内小テストを実施した。その結果、多くの学生に学習習慣の定着が見られるようになり、わずかながらも英語力の顕著な伸びを示す学生も現れた。

#### 実践例3：リスニング中心の時事英語

VOA ニュースを教材にして、個別に十分なシャドーイングを行った後、ボキャブラリー・リスト（事前配布）とディクテーション用紙を使ってディクテーションを行った。終了後、テキストを提示し、学生自身に間違いを訂正させた。確認が済んだら、教員が内容や重要表現を解説し、次回用のボキャブラリー・リストを配布した。ディクテーションの正確さを成績に反映させるようにした結果、学期の後半には授業前の自主的リスニングが習慣化し、ディクテーションの正確さが大幅に向上した。

**実践例4：応対能力向上を目指す英会話**

英語応対能力の向上を目標に、毎回の授業で、テキストの表現の解説・発音練習の後、与えられた状況における日本人と訪日外国人との対話をペア・ワークで作成・練習・発表させた。授業3回ごとに、それまでの対話をまとめて自然な形に修正したものをカメラの前で発表させた。オーラル・パフォーマンスの出来栄を点を高めに設定した結果、ペア・ワークの際に積極的に質問したり、熱心に練習したりするようになった。また、自分がわかる英語で何とか言いたいことを伝えようとする明らかな姿勢が見られるようになった。

以上の実践例は、筆者がこれまで担当してきた科目における取り組みの中で一定の効果が見られたものを抜粋し、要点のみをまとめたものである。まだまだ問題も大幅な改善の余地もある拙い取り組みだが、英語教育に関する取り組みや問題をみんなで共有して、参考にできるものは取り入れ、改善すべきところには意見を出し合うのが本研究会の目的の一つであると思ひ、今回読者の広場で紹介することにした次第である。

これらの取り組みを通して感じたことは、教員がほんの少し手間をかけ、ちょっとした工夫をすることで、英語授業の結果は思った以上に大きな違いが出ることもあり得るということである。様々な制約が増えて、ますますやりにくくなる英語教育だが、本研究会を通してアイデアや情報の共有を図り、会員の皆様の取り組みから勇気をいただき、めげずに頑張っていきたいと考えている。

**【2019年度研究会 活動報告1】****短期大学英語教育研究会 夏季研究会**

「あなたの授業・私の授業 – 授業実践の玉手箱 –」

日時：2019年8月30日（金）13:00～15:00  
会場：跡見学園女子大学

文京キャンパス 2号館 M2702 教室

さまざまな大学での授業実践の具体例を聞き、参加者全員で意見交換を行った。また今回は、都内のある短大での大規模なカリキュラム改革とその経過報告を伺う機会に恵まれた。フロアからの質問が止まず大幅に時間をオーバーするほどの活発な研究会となった。（中村公子）



<夏季研究会の様子>

**【2019年度研究会 活動報告2】****2019年第3回英語教育実践研究会**

日時：2019年11月30日（土）9:25～16:10

会場：戸板女子短期大学

プログラム：9:25～9:30 開会の挨拶  
9:30～10:20 事例発表1  
10:20～11:10 事例発表2  
11:50～13:10 講演  
13:20～14:10 事例発表3  
14:10～15:00 事例発表4  
15:10～16:00 情報交換会  
16:00～16:10 閉会の挨拶

第3回研究会は、第2回に引き続き戸板女子短期大学に会場校をお引き受けいただき、19名の参加者を得て、活発な意見交換がなされた。

事例発表1では、中村公子氏が戸板女子短大における4技能育成を目指す授業改革の試みを報告された。クラスを半分に分け、授業の前半と後半をそれぞれ日本人講師とネイティブ講師が担当し、各学科の学びにつながる内容を様々なアクティビティを通して学ぶという実践で、具体的な活動の紹介もあり、明日からの授業に役立つ有意義なご発表であった。

事例発表2では、日吉佑太氏が産業能率大学における外国人アシスタントを招いた授業実践の報告をなされた。英語を手段として他者を知り、コミュニケーションへの関心を高める授業実践の紹介であった。

お昼休みを挟んで午後最初には、本研究会の前身である「短期大学英語教育研究会」の発足当時から研究会を支えてくださった、高野嘉明氏（青山学院女子短期大学）に「英語を教えるということー理想と現実のはざままで30年ー」と題し、ご講演いただいた。日本の英語や英語教育に関する誤謬とその原因・理由の解説はまさに目からうろこであった。また、先生が「教師・教育者」としてできるだけ多くの学生と信頼関係を築き、様々な教育実践を重ねていらしたことに感銘を受けた。

次に事例発表3では、最近教育現場でも人気があるTed Talksを活用した英語によるグループ・プレゼンテーション・プロジェクトの事例が小抜久子氏より紹介された。学生たちは英語の技能面だけではなく、主体的・協働的に学び、学習意欲を向上させることができたようだ。

事例発表4では森永弘司氏より、文学作品、特に英詩と小説を活用した授業実践例が紹介された。学生の教養や読解力、モチベーションの向上を目指している教員にとって大変示唆に富むものであった。（前田隆子）



<第3回研究会 事例発表の様子>

### \*\*\* 会計報告 \*\*\*

本研究会は独立した研究会で、活動はすべて本研究会の参加費のみで運営されています。この場を借りて、2019年度の会計報告を致します。

#### 収入の部

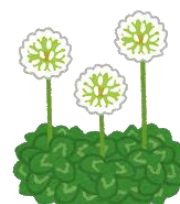
41,333 円	(前年度繰越金)
13,000 円	(夏季研究会参加費 13名)
57,000 円	(研究会参加費 19名)
54,000 円	(懇親会参加費 12名)
10,245 円	(寄付)
	計 <u>175,578 円</u>

#### 支出の部

1,966 円	(夏季研究会 茶菓子・飲み物)
8,554 円	(郵送費)
30,000 円	(講演者 謝礼)
60,060 円	(研究会懇親会費)
100 円	(講演者への水代)
	計 <u>100,680 円</u>

収入ー支出 = 74,898 円 (次年度繰越金)

2020年2月28日 会計報告 前田隆子  
会計監査 北川宣子



## \*\*\* 2020年度研究会のご案内 \*\*\*

## ◆第4回英語教育実践研究会

日時：2020年10月11日(日)

10:00~16:00

(開始時刻は多少変更の可能性あり)

会場：戸板女子短期大学(田町駅より7分)

講演：調整中

(決まり次第、本研究会ホームページに掲載いたします。)

事例発表(募集)/情報交換会

参加費：3000円

懇親会の参加費：5000円

申込先：本研究会ホームページの通信欄をご利用ください。

## \*\* 第4回研究会事例発表募集のご案内 \*\*

事例発表を募集いたします。皆様の日頃の授業実践の発表の場として、是非ご応募ください。

事例発表：第4回英語教育実践研究会

発表日時：2020年10月11日(日)

発表時間：60分(発表+質疑応答)

発表会場：戸板女子短期大学(田町駅より7分)

発表資格：現在、大学や短期大学で英語の授業を担当している教員、及び学校の種別を問わず、効果的な英語の授業を実践している人、めざしている人

応募締切：2020年7月11日(土)

応募方法：以下の点を明記し、本研究会ホームページの事例発表申込欄から送信

- 自薦 1) 応募者氏名、担当科目名
- 2) タイトル、要旨(和文400字程度または英文300語程度)
- 他薦 1) 推薦者氏名
- 2) 被推薦者氏名
- 3) 他薦の具体的な理由

問合せ先：本研究会ホームページの通信欄をご利用ください。

なお、事例発表の内容の詳細は、この会報『授業実践研究』の第4号に2ページ分(和文の場合21字×約150行：原稿用紙8枚相当)として掲載されます。会報『授業実践研究』が、皆様のご研究の公的発表の場となり、授業改善への貴重な情報提供の場となりますことを願っております。

## \*\*\* 編集後記 \*\*\*

英語教育実践研究会の会報『授業実践研究』も今年度で第3号となる。今年度より編集を担当させていただくことになった。無事に発行できることとなり、ご協力いただいた先生方にご場を借りて厚く感謝を申し上げたい。

この第3号より、下記に示してある本研究会のホームページに掲載することとなった。本会報が少しでも多くの方々の目に触れるものとなりますように、そして研究会に興味を持ってくださる方が増えますようにという願いをこめての決断でもある。本会報の公開が研究会のさらなる発展につながれば幸いである。

(北脇実千代)

## 授業実践研究 第3号

2020年3月31日 発行

## 英語教育実践研究会

(旧・短期大学英語教育研究会)

編集委員会：北脇実千代

研究会代表：浅野享三

英語教育実践研究会ホームページ

<http://tan-eiken.jimdo.com/>

本研究会は2017年に「英語教育実践研究会」と名称変更後も、このURLを引続き使用しています。ご利用ください。研究会の機関誌は『授業実践研究』に名称変更し、みなさまの研究成果やご意見を発表してまいります。

